

## ◆巻頭言◆

日本ナレッジ・マネジメント学会理事 小沢 一郎  
(専修大学経営学部教授)



最近、金刀比羅宮参りを果たすことができた。奥社まで 1,368 段と言われる石段を登りながら、ふと、「♪こんぴらふねふね」と口ずさみたかったが、幼少の頃にいつの間にか聞き覚えてしまったモノほど怪しいものは無い。スマホで歌詞を見てみた。

♪こんぴら船々 追手に 帆かけて シュラシュシュ 廻れば四国は  
讃州那珂の郡 象頭山こんぴら大権現 一度廻れば・・・

「おいて」とは追い風のことで、「ぞずさん」は象頭山だったのか。面白い！

調子に乗って、石段のぼりのリズムに合うわらべ歌を。

♪ずいずいずいころばし ごまみそずい・・・，ん～，何故，茶壺に追われるのか。休息しつつネットを見ると諸説あるが，合田道人氏による以下の説明が。宇治からお茶を江戸へ運ぶ「お茶壺道中」は大名行列より権威があり，子どもといえども行列に不作法があると切り捨て御免が罷り通った。そこで不作法が無いように気をつけるよう，庶民の心の叫びを歌に託したという説である。しかし，このような謎含みでは，せつかくの知恵自体が伝わらないことも懸念されてくる。

考えてみると，わらべ歌と同じく多くの諺にも，生活の知恵を次世代に伝える祈りの様なものが込められている。「夜に爪を切ると不幸になる」という諺は，（夜は暗いという条件下で）良く見えないと爪を切り損ねて癩疽（ひょうそ）などになるから注意，という知恵を伝えることが目的であろう。諺は古臭いものだとして全てを切り捨てる態度も，それを（時にスピリチュアルなものを感じて）盲信する態度も正しくはない。それは，夜は暗いという条件が伴えば現在でも成立する知恵であるし，そうで無ければ不成立なのだ。

この様に，知の伝達には「コンテキストを含めた知」として発信し，また受信することが本来必要なのである。しかしながら多くの場合，知の発信者にとっての状況は与件として扱われており，発信者自身も無意識のうちに多くの条件等が知の中に潜在しているものと考えらるべきであろう。つまり，時代，国・地域，文化などを超えた知の伝達においては，受信者サイドの理解力が大きく問われてくる。まさに「contextual intelligence（コンテキストを読み取る知力）」を一人ひとりが磨かなければ，これまで積み上げられた知を受信することができないばかりか，誤った解釈に陥ることとなる。

一方で、知に埋め込まれているコンテキストを理解する際に参照する、受け手側のコンテキストの変更は随時起こっているのです。知から受け取る意味合いも随時変化していると捉えるべきである。文化的にモザイク模様を形成し、さらにそれがスピーティに変化し続けているグローバル・マーケットを想定すればなおの事である。

極めて疲れる作業だなあ、と思いつつ奥社まで辿り着いた。帰途、974段目の菅原神社（菅原道真公）をお参りした。天神様のお力も是非お願いしたい。例えば松下幸之助翁の「水道哲学」にはどのような条件が意図的に、或いは無意識的に込められていたのだろうか。そのコンテキストを含めて現時点そのまま当て嵌まる地域は・・・、など取り留めも無く考えながら石段を下っていたら、いつの間にか表参道に着いていた。旨い生ビールと讃岐うどんが待っていたことは言うまでもない。

以上